

高楠順次郎における海外

海外体験とその果実

石 上 和 敬

はじめに

近代仏教学がその前提に「西洋と東洋との両面」を持つことは、本シンポジウムの「趣旨説明」に述べられている通りである。すなわち、近代仏教学は、西洋から移入された、サンسكريット語やパーリ語文献の解説に基づく文献学が、日本を含め東アジアに伝承した漢語中心の、かつ実践をも包含する仏教の学的伝統と出会うことから発展したという経緯それ自体が、そのことをわかりやすく物語っている。

本稿においては、日本の仏教学の分野に西洋由来の文献学を本格的にもたらし、その後、東京帝国大学を中心に日本の仏教研究の方向性を先導した高楠順次郎を取り上げ、高楠が欧州留学で獲得した学的成果と、日本の仏教研究の確固たる伝統とを、つまり西洋と東洋とをバランスよく統合していった観のあるその生涯について、学術的成果のみならず、教育活動、社会活動なども含め

て輪郭を描き出してみたい。我が国の近代仏教学の黎明期におけるキパーソンである高楠の生涯を、特に西洋との関係を中心に俯瞰することで、近代仏教学の成立過程において取れる西洋と東洋との関係性についてささやかな知見を提供することになれば幸いである。

一 高楠順次郎の生涯

はじめに高楠の生涯の概要を示す。^{〔1〕}

一八六六（慶応二）年広島県に生まれ（旧姓は沢井、結婚後に夫人の高楠姓となる）、地元の小学校教師を経て、二〇歳のとき京都に出て西本願寺が創設した高等教育機関「普通教校」に入学する。その後、一八九〇年、二五歳で英国オックスフォード大学に留学、マックス・ミュラーのもとでインド学、宗教学を学ぶ。オックスフォードを卒業後、独逸キール、ベルリン、ライプツィヒの各大学に学び、フランスのコレージュード・フランスも訪れるな

ど七年間の欧州留学は高楠の人生において貴重な財産となる。海外留学については次節で詳述するが、高楠はその後合計五回、海外へわたっている。

一八九七年に帰国後、末松謙澄通信大臣の秘書官などを経て、一八九九年東京帝国大学教授となり、学内に西洋由来の文献学に基づくインド学仏教学の礎石を築いていく。一九二七年六二歳での定年退官まで同大に奉職するが、高楠は学外においても幅広い活躍を見せる。高楠がかかわった教育機関だけでも列記するならば、東京外国語学校長、日華学堂や中央商業学校（中央学院大学の前身）の創設、武蔵野女子学院（武蔵野大学の前身）の創設、大宮成均女学校長、また、東京帝大退官後には、東洋大学長、千代田女子専門学校長、等々、多くの教育機関の創設にかかわり、また、運営を主導している。

高楠の主要な著作は『高楠順次郎全集』全一〇巻（教育新潮社、以下、『全集』）に収載されるほか、多作であるが、その真骨頂は、多くの学者たちの力を糾合して完遂した、複数の大規模な編纂事業の責任者を務めたことであろう。すなわち、漢語仏典の大全集『大正新脩大藏經』（全二〇〇巻）、古代インドのバラモン教聖典の翻訳『ウパニシャット全書』（全九巻）、そして東南アジアやスリランカに伝わる南方上座仏教のパーリ語聖典の翻訳『南伝大藏經』（全六五巻）などである。特に、『大正新脩大藏經』は現在でも漢語仏典のもっとも信頼されるテキストとなっており、その大部分がデータベース化され、世界中の研究者たちに利用されている。

また、高楠は学者としてだけでなく、教育者として、また事業

家としても多くの功績をのこしているが、それらを可能にした要因の一つに彼の人的魅力は挙げておかななくてはならない。高楠の交流範囲は多岐にわたっており、学者にとどまらず、政治家、実業家、宗教家、官僚、等々多彩である。この点も後に触れる。高楠は、亡くなる前年（一九四四年）に文化勲章を受け学者としては有終の美を飾ることになる。ただ、その家庭に目を転じれば、八人の子どものうち七人に先立たれ、晩年には妻も亡くすなど、その華麗なる業績と比す時に、家庭生活の不遇は対照的である。

二 高楠の欧州留学について

次に、高楠の欧州留学の概要を紹介する。

高楠は一八九〇年三月、留学のため英国へ出発、九月にオックスフォード大学へ入学する。留学資金は夫人の実家からの援助とされる。オックスフォードでは、インド学、比較宗教学の権威であったマックス・ミュラーに師事した。これは、同じくマックス・ミュラーのもとで学び、一八八四年に帰国していた真宗大谷派の僧、南條文雄からの勧めによる。高楠は同大においてサンスクリット語などの古代インド語をはじめ、ギリシア語、ラテン語などの西洋古典語、さらに宗教哲学などを修め、一八九四年にB・Aの学位を取得している。

オックスフォードを卒業後、高楠は独逸キール大学、ベルリン大学（一八九五―一八九六）、そしてライプツィヒ大学（一八九六―一八九七）の各大学に学び、高名な学者たちの聲咳に接し、一

八九七年ライプツィヒ大学からはドクトル・フィロソフィエの学位を受ける。さらにフランスのコレージュ・ド・フランスにてシャパンヌや生涯の友となる若きシルヴァン・レヴィらと交流を深める。その後、オックスフォードに戻り、M・Aの学位を得て、一八九七年一月に帰国した。

高楠の欧州留学の特徴を挙げるならば、オックスフォードでB・Aを取得後、独国や仏国など欧州各地のインド学東洋学の碩学たちを訪ね貪欲に教えを乞うている点であろう。そしてこの留学において築かれた欧州諸学者との人脈が、その後の高楠の学者としての活躍の一つの基盤となっていく。特に、帰国後の高楠の学問の方向性を決める多くのヒントは、留学時の欧州の諸学者たちから示唆を得たものと思われる。

次に高楠の留学時代の学問研究の特徴を考えてみたい。インド語や西洋古典語を含めた欧米諸語の習得にかなりの時間を割かれたようであるが、高楠が留学時代に公にした主要業績を一瞥すれば、彼の方針が明瞭に看取できる。それを一言で言えば、漢語史料を活用した研究ということである。たとえば、漢訳でのみ伝わる『観無量寿経』の英訳、また、中国僧義浄の旅行記である『南海寄帰内法伝』の英訳、また、パリー語で伝承されている『ミリンダパンハ（ミリンダ王の問い）』に相当する漢訳仏典『那先比丘經』の紹介、さらには、戒律文献に対する漢訳とパリー語の注釈書の比較研究、等々、いずれも漢訳史料を駆使した研究が顕著である。これらは、恩師マックス・ミュラーをはじめ欧州の学者たちからの薦めによるものも多いが、結果として、欧州学界にイン

ド学仏教学の分野における漢語史料の重要性を知らしめることになった。そして同時に、そのような漢語史料の扱いに長けた高楠自身を十分にアピールする効果も併せ持ったことであろう。一介の東洋の若き学徒が欧州の一流学者たちに一目おかれることになるには、このことが大きく与かっていたと考えられる。ここにすでに、西洋流のインド語文献に基づく文献学と、東洋に伝来した漢語仏典とのいずれにも精通する高楠の研究者としての先見性を認めることができるのであり、その後の研究の方向性も留学時代以来自ずと定められていったのかもしれない。

三 高楠が西洋から受けた影響について

さて、ここまで高楠の生涯と七年に及ぶ留学の概要を紹介した。本稿のテーマは、高楠の研究業績や事績において欧州留学に由来する西洋からの影響が極めて顕著であることを明らかにすることである。その際、先にも触れたが高楠の基層にあった、東アジアに伝承された漢語仏典に基づく学的素養の上に、西洋由来の近代仏教学の手法が取り入れられるという構造は押さえておく必要がある。それでは、いくつかの事例を確認してみよう。

高楠の学者としての功績の一つは、東京帝大に西洋由来の近代仏教学を本格的に導入し、その後の我が国における仏教研究の方向性を定めることになった点であろう。明治時代以前は宗派ごとに漢語仏典に基づく宗学の伝統があり、明治時代に入ってもそれは継承されていたが、南條文雄、高楠らの留学帰国者たちによって東京帝大を中心にインド語仏典に基づく近代仏教学が移入され

ることになった。この影響は大きく、伝統宗学を学ぶ宗門系大学においても、徐々に高楠らのもたらしたインド語原典に基づく近代仏教学の占める位置が大きくなり、宗学と西洋由来の文献学とが同居する体制が形作られていく。帰国組の高楠らが西洋仕込みの文献学を日本に移入したことそれ自体は至極当然の成り行きであつたろうし、日本の仏教各宗派も西洋の進んだ仏教学を率先して受け入れることで、自派の優位性を主張しようとした節も見られる。

したがって、高楠に見られる西洋からの影響という観点から言えば、西洋由来の文献学を我が国にもたらしたことそれ自体よりも、ここで着目したいのは、文献学に基づくその学問の中身である。すなわち、それまでの日本でも仏教がインドに起源することは周知の前提であつたが、一部の例外を除けば、インドの諸思想を幅広く視野に取め、あくまでもインド思想のなかで仏教を捉えようという発想は一般的ではなかった。しかしながら、高楠は仏教をより深く理解するためにも、インド思想全体の枠組みのなかで仏教を捉える必要性を感じ、この方向性が、その後の東京帝大を中心とした我が国のインド学仏教学の特徴にもなっていく。このような高楠のインド学仏教学研究に対する態度こそは、留学時代に教導を受けた西洋諸学者たちからの薫陶に他ならない。以下は、オックスフォードでサンスクリット語の教授を受けたアーサー・アンソニー・マクドネル氏についての高楠の回想である。

しかして予がオックスフォードを辞してよりキール、ベルリン、ライプチヒの各所において常にヴェーダ研究を主とせ

しは、氏（マクドネル¹石上注）が熱心の勧告また大いに与りて力あり。ある学者のごときはヴェーダの直接に日本に關係なきをもつて、その研究の無用なるを説きしが、予はこれに對して、そはわが日本の学理研究を世界の学会に關係なきものなりとみるより起る偏見なりとてマクドネル氏の言を証し、他の学問上日本人の功勞を例示し、わが東京大学研究の欧州大学に讓るなく、かつ學者の度外視すべからざるもた「足るを説きたり。（中略）その後同氏よりの書面によれば、（中略）「予は頃日、南條・笠原両氏のことにつき馬翁の書きしものを一見せり。両氏の仏教サンスクリット語の功勞あるは謝するに余りあり、予はなお足下輩が變則的仏教サンスクリット語のみを講ぜず、正則的一般のサンスクリット語をも起こし、單に外道（仏教を指す）の教義取り調べにのみ従わず、内道バラモンの教義をも学理上より研究せんことを望む。余は足下輩研究の功勞を期するの一人と信ぜよ。」（後略）²

高楠はこのような示唆のもとに、たとえば、古代インドのバラモン教の聖典『ウパニシャッド』百数十編を翻訳した『ウパニシャット全書』（全九卷）を監修している。高楠がウパニシャッドに強く関心を持つことになったのは、キール大学留学時代のように、恩師のヘルマン・オルデンベルクから再度、ウパニシャッドの和訳のことを依頼されたという（下記はヘルマン・オルデンベルクを一九一九年二月にゲッティンゲンに訪ねた際のやりとりである）。

しかして氏（オルデンベルク³石上注）はその『ウパニシ

ヤッド」和訳のことを再囑して、なお、自分の事業として、律藏中「スッタヴィバンガ」の翻訳はこれを成就すべき責任があるのであるが、(中略) 早晚これを欧訳してくれとのことであつた。予は現在従事せるパーリ語字書の完成に繼いで、これを訳出する予定であることを述べた。(後略)

次に、高楠の最大の業績とされる漢語仏典の大全集『大正新脩大藏經』の編纂の経緯についても触れておきたい。中国では一〇世紀以来、木版の大藏經がたびたび製作され、朝鮮半島や日本でも何度が開版されてきた。また、日本では古くは天平時代に遡る写經もまとまつてのこされていた。しかしながら、これらの複数の版本や写本を比較対照し、厳密な校訂作業を経た上での大藏經はそれまで存在していなかった。このような状況下、古寺での写經調査に取り組んでいた高楠に、駐日英国大使チャールズ・エリオットが諸本対校を経た大藏經の出版を熱心に薦めたのである。また、駐日独国外使ヴィルヘルム・ゾルフもエリオットとともに強く薦めたという。以下は高楠の回顧である。

この人(エリオット＝石上注)はいま奈良に逗留して日本の大乘仏教を研究しておりますが、ちょうど私が石山寺に行つて調べていると、来山して黙つて私の調べを見ている。東寺でも二度きましたが青蓮院には前後三度きました。それから高野にいる時も一度きました。石山寺にいる時には二度きました。

私が「天平時代の写經を版本がいか写本がいか比較して見ている」といったら、「結果はどうかね」と尋ねる。「そ

れは写本の方がよほどいい」というと「今まで出版する時に比較したことがあるか」(中略)「それは直ぐにやらなければならぬ、これはいつたい何時頃のものか」「西暦で七百五十年の奈良時代の物だ」「八世紀の物が、若し西洋にあつたら、しかもそれがバイブルに関係した物であつたら耶穌教者は一寸刻みにして研究するだろう。(中略) こんなにたくさんある物を比較しないということは日本学者の恥だ。またこれを比較したが、それを出版しないということは不都合である」というような話をした。その日は帰つてまた翌日来る。同じ話をした。実は私が一切經を出版しますことを初めて決心しましたのはその時であります。

(ゾルフ大使は＝石上補) その時この一切經の話を聞いて、サー・チャールズ・エリオットから聞いたらしい。(中略) ゾルフも梵語学者でありまして、梵語の教授になる積りだったらしいのでありますが、そういう訳で興味も深い。「どうしてもやらなければならぬ。西洋人が安心して読めるような、出来得るだけの対校もしてあつて、しかもその対校が行き届いておつて學術的に値うちのあるような一切經を作らなければならぬ、それを作るのにはお前が一番適任者だ」というふう

に、二人から盛んに焚付けられて、(後略)

以上のように高楠の最大の業績とされる『大正新脩大藏經』の刊行においても、文献学に造詣の深い二人の西洋人からの強い薦めがあつて編纂を決定したことを自ら述べているのである。

次に、高楠がネパールから将来したサンスクリット語写本につ

いて触れてみたい。現在、東京大学には高楠と河口慧海がネパール等で収集した一八〇点にも及ぶサンスクリット語写本が収蔵されており、インド学仏教学の分野では極めて貴重な研究史料となっているが、このネパールでの取経を決意したのも、留学時代にフランスで知己となったシルヴァン・レヴィからの助言であった。

ネポールには大乘仏教の原本即梵本が沢山存在して居ります。これは印度にもない、西藏にもない、唯ネポールのみに存して居る、之を探索して採集しやうと云ふのが私の専門の上から大切な役目とした所であります。

たしか氏（レヴィ＝石上注）の第一の雪山（ヒマラヤ＝石上注）旅行の後であったかと思う。（中略）雪山に行き梵經を得ることの方法を十分に会得したことも委しく氏より聞いた。これが私が大正元年にインドに入りネパールに行く決心をした動機であった。⁶⁾

さて、高楠は研究者の他に、教育者、事業家などいくつかの顔を持っていたが、とりわけ、複数の教育機関の創設にかかわった点は特筆されよう。中国からの留学生の予備教育を行う日華学堂⁷⁾、仏教主義による女子教育を目指した武蔵野女子学院（現在の武蔵野大学の前身）、仏教系の大宮成均女学校などがあるが、なかでも中央商業学校の創設（一九〇二年）は興味深い。中央商業学校（現在の中央学院大学の前身）は、高楠はじめ普通教校の出身者七名が中心となって京橋区に設立されたが、創設にあたり高楠の念頭にあったのは英国の実業学校の存在であった。

高楠は「今こそイギリス紳士に匹敵する、教養と倫理を身

に着けた真の商業人の育成を目的とした『実業学校』つくるべきだ（ママ）」と力説した。⁸⁾

なお、高楠は校主であり、校長は高楠の英国留学時代の友人、南岩倉具威男爵が就任した。ここでも、高楠の留学時代の体験が学校創設につながり、校長にも英国を良く知る人物が就任するなど、西洋を強く意識した学校創設事業であったことがわかる。

以上、高楠の主要な業績に見られる西洋からの影響についていくつかの事例を紹介した。個々の事例紹介において確認は省略したが、特に学術上の業績においては、留学時代に吸収した西洋の学的伝統を存分に咀嚼しながら、東洋に伝承した漢語中心の伝統的仏教学の基盤を活かしたものであることが読み取れるであろう。

四 海外滞在経験に基づく人脈

最後に、高楠の諸活動の一つの源泉とも言える、各界に及ぶ幅広い人脈についても一瞥したい。その人脈の主要な部分において、何らかの形で留学時代に淵源するものが多いように思われる。

はじめに末松謙澄との関係に触れてみたい。末松は伊藤博文の娘婿であり、衆議院・貴族院議員、逓信大臣、内大臣などを務めた人物である。末松は英国ケンブリッジ大学に留学経験があり、同時期にオックスフォード大学に留学していた南條文雄と親交を持った。高楠は欧州より帰国した翌年、南條の斡旋により末松逓信大臣の秘書官となった。在任はわずか四か月であったが、鷹谷俊之『高楠順次郎先生伝』は次のように述べる。

この秘書官時代には伊藤博文の秘書頭本元貞との交りもあ

った。特に、上田万年博士とはこの間に親しさを増したかと思われる。(中略)先生が東京大学に確乎たる職を得られたのは全く上田博士の斡旋によったのである。⁹⁾

高楠はこの秘書官時代に大いに人脈を拡げたと推測される。また、その後も末松は高楠に目を掛けたようであり、一九〇四年から末松が欧州に赴く際に随員として同道している。この末松ミッションは日露戦争に際し、欧州世論を日本に有利に導くための国家的使命を帯びた使節であり、この随員に選ばれたことは高楠が政治的感覚をも十分に備えた人物であることを物語っている。

このような末松との関係も、元をたどれば、南條文雄を介しての、英国留学という共通体験に拠るところが大きいと思われる。

この他にも、高楠は英国留学経験者の人脈を大切にし、活用したようである。当時、オックスフォードとケンブリッジへの留学からなる「剣牛会」という組織があったが、高楠は同会にも折々参加している。一例として、アーネスト・サトウの日記(1906.5.30)に同会に出席した高楠への言及が見られるので紹介する。

ケンブリッジ・クラブの晩餐会に出る。(中略)私は黒田〔長成〕侯爵の左隣に坐り、向い側は菊池〔大麓〕男爵と林〔董〕子爵で、私の左隣は〔東京帝国〕大学総長の浜尾〔新〕であった。テーブルの端に近いところにマックス・ミュラー教授の下でサンスクリット語を学んだ高楠〔順次郎〕教授と毛利〔五郎〕男爵がいた。¹⁰⁾

また、一九二二年に來日した英国皇太子の歓迎晩餐会に招かれる栄に浴したことなども英国留学経験者であったことによるもの

であらう。

さて、高楠は留学時代、独国の三大学にも学んだが、その後も独国との関係には深いものがあつた。たとえば、一九二六年、高楠は日独文化協会の初代理事長に就任するが、これも当時の駐日大使ゾルフ(前出)が、高楠と同じく、キール大学でインド哲学等を学んだ学者であつたことが関係している。

かくして大正一五年六月、(中略)ドイツ・ノーベル化学賞受賞者フリッツ・ハーバー、ヴィルヘルム・ゾルフら先導による文化交流専管の日独文化協会が発足した。そして前記ニユースに登場する初代理事長高楠順次郎はゾルフ大使とインド哲学、仏教学のうえに結ばれた仲だった。高楠は(中略)偉大な業績を遺した仏教界稀有の国宝的学者(戦前の文化勲章受章者)で、欧米学会との連携は高楠の独壇場だったのである。¹¹⁾

最後に

以上、高楠が欧州留学の経験を、学術面、教育事業の面、また、各界に及ぶ人脈構築の面でも存分に活かしていた一端を紹介した。本稿は、高楠が西洋から受けた影響という側面に焦点をあてることになったが、高楠はけつして一方的な西洋礼讃者ではなく、むしろ思想面では東洋的、日本的な伝統を重んじる傾向が強いと指摘される。さらには、高楠の言説が戦前の国家体制に順応し過ぎていう批判すらも見受けられる。高楠の思想形成における西洋からの影響については本稿で論じる紙幅は残されていない

が、稿を締めるにあたって次の点を指摘しておきたい。

高楠は帰国の翌年に末松大臣の秘書官に就任し、そこを一つの起点に政財界との関係を深めていった。この秘書官就任がその後の高楠の道行きに大きく関係したことは間違いない。武蔵野大学には高楠の自筆日記がのこされているが、そこからは、高楠の学界、宗教界はもとより政官財界に広く築かれた人脈が明瞭に浮かび上がる。特に、普通教校の出身ということから、西本願寺、大谷伯爵家との関係は深く、戦前の大谷家が皇室と近い姻戚関係にあったことを想起するならば、高楠の占めたポジションもそのような文脈のなかで捉える必要がある。高楠を見ていく場合、彼の生活圏が奈辺にあったのか、ということも考慮に入れる必要があると考えられるし、そのことは同時に、我が国の近代仏教学の黎明期においては、仏教学者を取り巻く様々な周辺環境が学問や言説のあり様に少なからず影響を与えていたことを、高楠の生涯が物語っていると言えるのかもしれない。

最後に、武蔵野女子学院（武蔵野大学の前身）設立の思いを問われた高楠のことを紹介することをお許しいただきたい。

仏教精神を体し、平和社会の建設を荷う女性を育て、できれば宮中の女官に推挙したい¹²

このことばのなかに、高楠の生涯と思想のいくばくかが凝縮されているように思えてならない。

(1) 高楠の生涯については、鷹谷俊之『高楠順次郎先生伝』（武蔵野女子学院一九五七）、武蔵野女子大学仏教文化研究所編『雪頂・高楠順次

郎の研究―その生涯と事蹟』（大東出版社、一九七九）などが基礎資料となる。なお、本稿の関心については、碧海寿広「高楠順次郎―日本人の近代仏教学」『日本仏教と西洋世界』（法藏館、二〇一九）から大いに示唆を受けた。

(2) 高楠順次郎「東洋学者評伝 訪問余談 三」『全集』第八巻、一八九七、五一六―七頁。

(3) 高楠順次郎「嗚呼オルデンベルク氏」『全集』第十巻、一九二〇、三〇七頁。なお、『ウパニシャット全書』翻訳に際してオルデンベルクらの影響があった点については、加藤隆宏「ヴェーダーンタ哲学研究前史―〈ウパニシャッド〉の受容」（『文化交流研究・東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』第三巻、二〇一九）に詳しい。

(4) 高楠順次郎「東洋文化史における仏教の地位」『全集』第一巻、一九三〇、四三三―四頁。また、この点は、川崎信定「高楠先学」『大正大藏経』発刊を決意させた事々（『豊山教学大会紀要』第四〇号、二〇一二）にも詳しく取り上げられている。

(5) 高楠順次郎「ネポール国に就いて」『地学雑誌』第二六輯二号（第三〇二号）、一九一四、一〇六頁。

(6) 高楠順次郎「シルヴァン・レヴィ博士を憶う」『全集』第十巻、一九三七、三二―三頁。

(7) 日華学堂については、藥殿武「高楠順次郎の教育思想―日華学堂の転地勉学を通じて」(GLOBAL STUDIES) 3、二〇一九）などに詳しい。

(8) 『中央学院一〇〇年史』中央学院、二〇〇一、三三頁。

(9) 鷹谷、前掲「高楠順次郎先生伝」三八頁。

(10) 小山騰「破天荒〈明治留学生〉列伝」講談社、一九九九、二二六、二二九頁。

(11) 花井清「高楠順次郎」『日独交流の架け橋を築いた人々』日独協会、二〇〇五、八八頁。

(12) 武邑尚邦「恩師を語る」『宗教』平成二〇年五月号、教育新潮社。

（いわがみ・かずのり、仏教・宗教、武蔵野大学教授）